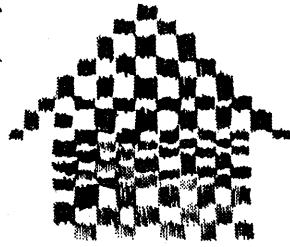


捨てられない

家庭保育

佐野恵子



世の中には、捨てて片づく世界と、捨てないで片づく世界があると思います。子どもを生んで育てるといふ仕事は、まさに捨てないで片づく世界に属しているのだと思う時があります。私は、現在、七才・六才・二才・一才の四人の子どもと共に毎日を忙しく過ごしています。子どもたちが、朝目覚めてから、夜眠りにつくまでの間、身心共に子どもから離れられずに一日が過ぎていきます。小学校に送り出し、幼稚園に送迎し、下の二人の子どもを遊ばせながら、必要最低限の家事をこなし、四人の子たちの心と体の空腹を満たすには、緊張と、耐え

ることと、待つことが要求されます。

時々、夕方になっても、台所は朝・昼の食器が山積みされている時があります。それなのに一才の娘が、どうしても外遊びをしたい、とぐずる時があります。そうなるとうとうしようもなく、家の中のことは放って、外に出ます。そして、夕方の外遊びを楽しむことにしています。夏の日の夕方は、暑い陽ざしもなく、空の色も刻々と変化して、なんとなく心安らぐ時間です。あたりが薄暗くなり始めて、ようやく家に入ると、現実が待っています。台所は手のつけようのないあり様、本当に悲しくなるのをグッとこらえて、なんとか子どもたちの空腹を満たすべく、できる範囲の食事を作らなければなりません。上の子たちは、少しでも好物のものがあれば、それで文句も言わずに食べてくれたりして、なんとか時が過ぎ、ホッと一息つくことがあります。

別のある時は、父親の帰りが遅い日のことです。夕食が遅くなってしまい、二才の子は遊び疲れて眠くなるし、一才の娘も、手や顔をこはんだらけにしてぐずり始めるし、七才の兄は、友だちとの野球遊びの話をしたくて、次々と話しかけてくるし、六才の娘も負けずに、そ

の日、あったことの話をしたがるのです。手と顔と耳とをそれぞれ別々の方に向けながら、下の子たちの手と顔を拭き、パジャマに着がえ、ついには兄と姉に「あとにしてね!」と呼んで、下の二人を寝かせるべく別の部屋に移って行きます。この二人が眠れば、ゆっくりした静けさが戻ってきます。それまでは、この現実を放り出す(捨てる)わけにはいかないのです。二人を抱きかかえる時のような、この重みを全身で受け止め、今を生きるしかないのです。グッとこらえると、次には休らぎと静寂が待っていてくれるのです。時が解決してくれる……そうだからこそ、今を、大変なりに、焦らずに対処できるのです。こんなことをいろんな場面で体験します。

どんなに忙しくても、子どもの要求に、ちょっとした間つき合うと、子どもはそれでも満足して一人で遊び始めたり、次の用事についてきてくれたりします。このように、その場面を切り捨てないで、焦らずに、混乱や当惑などの重みにも耐えて待つと、その場が片づき次が開けることは、子どもが増えるごとに実感しています。もちろん、ほんの少しも待てない時には、選択し、切り捨てることも大切だと思います。そういう時は、子ども

も解って、長くぐずらないような気がします。

また、捨てて片づく世界の中でも、子どもは、捨てることがとても不得意のようです。四人目が生まれて、家政婦さんを頼んだことがあります。彼女は片づけるプロですから、がらくたみたいなものは、捨てたり、一まとめにしたりして、部屋の中はアツという間に片づいてしまいました。ところが、私と子どもと一緒に部屋を片づけると、特に五・六才位までの子だと、ちょっとした紙の切れ端まで全部とっておきたがるので閉口してしまいます。引き出しの中も全部つっこんで、それで満足してあります。ところが小学校二年生になった兄が、最近きれいに片づけるようになったので驚きました。必要なものと、そうでないものとの分類ができ、片づけると気持ちが良いということがわかってきたのだと思います。幼児期を卒業しつつあるのだと思います。そうすると逆に、幼児の間は、片づけられないことを、捨てられないことを、むしろ尊重してあげたいと思うのです。

家庭の保育とは、やはり、捨てられない世界、そういう幼児の時代とつき合う役割も担っているのではないかと……という思いを深くしているこの頃です。